

## 神のものは神に返せ

### ルカによる福音書 20 : 20 - 26

20:20 そこで、機会をねらっていた彼らは、正しい人を装う回し者を遣わし、イエスの言葉じりをとらえ、総督の支配と権力にイエスを渡そうとした。20:21 回し者らはイエスに尋ねた。「先生、わたしたちは、あなたがおっしゃることも、教えてくださることも正しく、また、えこひいきなしに、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。20:22 ところで、わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていませんでしょうか。」20:23 イエスは彼らのたくらみを見抜いて言われた。20:24「デナリオン銀貨を見せなさい。そこには、だれの肖像と銘があるか。」彼らが「皇帝のものです」と言うと、20:25 イエスは言われた。「それならば、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」20:26 彼らは民衆の前でイエスの言葉じりをとらえることができず、その答えに驚いて黙ってしまった。

「わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていませんでしょうか。」この問いは、当時のユダヤ人にとって重要な問題でした。ユダヤという小さな国はローマ帝国の属国で、自分たちの国に納める税だけでなくローマに納める税が課せられていました。これをめぐってユダヤ人の間では国を二分する論争があったのです。一方の人々は、自分たちは神に仕えるべきで、ローマに仕えるべきではないのだから、税を納めるのはもつてのほかだ、と考えました。この人々を熱心党と言い、過激な思想を持ち武器を取ることも厭わないという人々でした。後にこの考えが優勢となり、西暦66年に戦争になります。もう一方の考えは、もっと穏健なパリサイ派の人々のもので、ローマと協調して平和にやっ払いこうというもので、税金を納めるのも致し方ないと主張しました。この時点ではこちらの考えが優勢でした。ですから、イエス様に向けられた税金に関する問いは、当時の人々にとってまじめな問だったのです。

ところがイエスを殺そうと謀る指導者たちは、この質問を、イエスを罠にかけるための手段にしました。この質問自体は深刻な質問でしたから、「正しい人を装う」(20:20)ことは簡単でした。税を納めてもよいと言えば、民衆はイエスに失望するでしょう。特に熱心党とその支持者たちはイエスから離れていくでしょう。逆に、納めてはいけなさいと言えばどうなるでしょう。ローマに反逆する者として、逮捕し、ローマに引き渡し、死刑に処することができるのです。これまでのイエスの言動やイエスに対する民衆の支持を思えば、こちらの答えが返ってくる可能性が高かったのです。このことを見越して、回し者たちは、「あなたのおっしゃることも、教えてくださることも正しく、また、えこひいきなしに、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。」(20:21)と言います。もしイエスがごまかすような答え方をすれば、日ごろの確信に満ちた姿勢と違うじゃないかということになり、これもまた民衆の支持を失うことになります。逃げるできないように、あらかじめ布石を打つ、実に巧妙なやり方です。

これに対するイエス様の答えは見事なものだったと聖書は記します。週報の表紙にも印刷しましたが、「カエサル」つまり「皇帝」という意味の文字とともに、その肖像の刻まれた銀貨を持ってこさせ、「皇帝」つまり「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」(20:25)とおっしゃいま

した。当然イエスは、神に仕え神殿のみに税を納めよと言うであろうと期待していた人々の目の前に、銀貨を示して、人々がそれで生活しその恩恵を受けているという現実を、まざまざと思い起こさせました。恩を受けておりながら仇で返すことはできないわけです。

これによって回し者たちは、「イエスの言葉じりをとらえること」ができなかったと聖書は言います。このイエスの返答は、見方を変えれば、「あなたは神に恩恵を受けているのか、それとも皇帝の恩恵を受けているのか。あなたは自分でどちらだと考えるのか。問題はあなた次第ではないのか。」と逆に問いを投げ返しているということでもあります。これはある意味、はぐらかしてはいないでしょうか。結論は自分で考えなさいということですから。なるほどそれも、政治的な駆け引に明け暮れ、人間同士の思い計らいだけで生活していた人々を、神の前に立たせるという効果はあったでしょう。けれどもイエスは直接には答えていないわけです。ある意味、「逃げ」です。非常に巧みに攻撃をかわしているという、それだけのことではないでしょうか。そして、もし逃げであったのなら、遣わされた回し者は、「いえいえ、私たちは、あなたの考えを聞きたいのです。」と言い張ることもできたはずですが。けれども彼らは、「その答えに驚いて黙ってしまった」(20:26) のでした。びっくりして言葉も出ない、そういう状況です。そこには、彼らが押し黙らざるを得ないような何か、彼らの胸を貫くような何かがあったのです。

イエスの言葉には、人々をして自分が思ってもいなかったような地平に立たせるものがあります。それは「カエサルのもはカエサルに、神のもは神に返しなさい。」(20:25) という、この言葉の中に隠されています。注目すべきは、「返す」(ギリシャ語で「アポディドマイ」) という言葉です。イエス様は、回し者の言葉、「納める」(これはディドマイと言います) を「返す」(頭にアポを付けてアポディドマイ) に変えているのです。「ディドマイ」というのは「与える」という意味です。

つまりどういうことかということ、人々は税を納めることで、「与える」側に立っていました。自分はどちらに加担するのか、祖国とローマと、どちらに力を貸すのか、と。これは自分にはたとえいくばくかでも、力があると思っている人の考えです。基本、自分のものは自分のものだと考えているのです。けれどもイエス様は、「本当にそうなのか？」と問うのです。

パウロはコリントの信徒への手紙の4章7節でこう言っています。「いったいあなたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょうか。もしいただいたのなら、なぜいただかなかったような顔をして高ぶるのですか。」イエス様が、「返せ」とおっしゃったときに、そこには「自分で考えよ」ということもあったでしょうが、それ以上に、「あなたのものはあなたのものではない、それは『返す』べきもの、いや、あなたの存在そのものも、あなたのものではない」ということに目覚めさせる、正気にさせるものがあったのです。

自分の力で何かできるという姿勢そのものを、イエス様は問われるのです。あなたはもっと謙虚になるべきではないのか。ローマに加担するとか、祖国に仕えるとか、そういう姿勢ではなく、そもそもあなたは無ではないのか。神によって無から創造されたものではないのか。この立場に立った時に、「カエサルか神か」などという問いは、どうでもよいこと。霧散してしまいます。誰に借りたものにせよ、返すべきものは返す、それだけです。

この回し者は、そしてその背後にいる、支配者、律法学者らは、自分が無である、自分が「いない」という事実を愕然とするのです。敵であった彼らが、次第にイエスに魅かれていく様子がこの後、描かれています。

さて、私たちはどうでしょうか。自分が「いない」ということ、自分のすべてが貰い物であり借り物で

あるということ、このことをどれだけ真実味を持って受け止められているでしょうか。もらった命が、親からであれ、社会からであれ、神からであれ、それが初めから自分のものであったような気持ちでないでしょうか。「服を着る」と書いて「着服」(ちゃくふく)と読みます。自分のものではない人様の着物であっても、一旦それを着てしまうと、次第に自分にしっくりきてきて、あたたかも、初めからそれが自分のものであったような気がしてくる。これが着服です。私たちはいただいた命を着服していないでしょうか。

正直、私は、まだまだ自分が自分であるような気がしています。言葉も出ないほど驚いてはいないかもしれない。イエスの前で自分の本性に気づいた律法学者の域にすら達しておりません。それでもこの言葉をいつも聞いていたいと思います。詩編100篇、「主こそ神、主は我らを造られた。我らは主のもの、その民、その牧の羊。」

